

一八八三年五月二十七日(日)

ドツキネーシヨル
南 神 寺院における聖ラーマクリシユナと信者たち

タクール、聖ラーマクリシユナは、ドツキネーシヨル南 神 寺院の自室のなかで、立ったままで信者たちと話をしておられる。今日は日曜日で、ジョイスト月十四日黒分五日目。キリスト暦一八八三年五月二十七日、午前九時ころ。信者たちが次々と集まつてきた。

聖ラーマクリシユナは、校長ほか信者たちに向かつて話される。

「いがみ合いはよくないよ。——シヤクテイ派、ヴィシユヌ派、ヴェーターンタ派、みんないがみ合っているが、あれはよくないことだよ。パドマローチャンはバルドワンの王室協議会の学者だったが、協議会である時、議論したことがあつた。——シヴァとブラマーとどちらが偉大か、ということだね。パドマローチャンは実にうまいことを言つたよ。『私には分かりませんが。私はシヴァ大神と話をすることもないし、ブラマー大神とも語り合つたことがないから』(一同笑う)

熱心になれば、どの道を通つてもあの御方に達することができる。けれども、信仰は堅固ニシユタであるのがいい。堅固シタタな信仰はもう一つ、不動の信仰と言つてもいい。一本幹の木が真つ直ぐに上へ伸びるよなものだ。あれこれ気の変わる信仰は、五本も幹のある木だ。グーピーたち(クリシユナを慕つた牛飼

い女の心はほんとに堅固ゴジュクだったから、プリンダーヴァンにいたころのクリシュナ——つまり、孔雀の羽をかざった、素敵な頭をして黄色い腰バンドを垂らした、牛飼ゴバールい人姿のクリシュナのほかは、どんな姿も一切見ようとはしなかった。マトウラーで王者の衣装を着け、頭にターバンをしたクリシュナを見たら、頭をベールで隠してしまった。そして、こう言った——『この人はいったい誰かしら？こんな人と口をきいたら、私のクリシュナを裏切ることになるわ！』

妻が夫に仕えるのも堅固な信仰だ。夫の兄弟にも食事の世話をしたり、足を洗ってやったりするけれども、夫とは特別な関係をもっている。こんなふうに、自分の宗教にも貞操堅固にできる筈だよ。といって、他の宗教を毛嫌いしてはいけない。それどころか、そういう人たちと仲良くするようにしなければね」

タクールはガンジス河で沐浴されてから、カーリー堂にいらっしやった。お供は校長である。礼拝の座にお着きになり、大実母の蓮華の御足に花を供え、また時々、ご自分の頭の上にもものせられた。そして深い瞑想に入られた。

〔宇宙の母とアートマンへの祈り——除災拔苦の真言マントラと踊り〕

かなり経ってから、タクールは座から立ち上がられた。内にもよおすものを抑えきれぬご様子で、手足を舞い踊らせていらっしやる。そして、口で大実母の名をと覚えておられる。「大実母マよ、災いを消し給え、除災拔苦のお方よ！」肉体を持っていれば悲しみや災難があるのだ。だからあの御方を、

除災拔苦の御方と稱ぶ大真言を唱えて祈るようと、人々に教えていらつしやるのだろうか。

〔昔のこと——聖ラーマクリシュナとジャマプクルのナクール・ババジ〕

やがてタクールは、自室の西側ベランダに出られてお坐りになった。まだ靈的恍惚状態が覚めやらぬ様子だ。傍にはラカール、校長、ヴィシユヌ派の修道者のナクールがいた。タクールとナクールとは、二十八、九年も前からの知り合いである。タクールが最初にカルカッタに出てこられてジャマプクルに滞在なさり、附近の家々を祈禱して歩いておられた時分、ヴィシユヌ派のナクルの店に買物に行かれ歓談なさるのを楽しみにしておられた。ペネテイでのラーガヴ・バンディット(ラーマ学者)の大祭に出るため、ナクール・ババジは最近ほとんど毎年のようにタクルのところ立ち寄つて会っている。ナクールはヴィシユヌの信者であり、彼自身も時々、大祭を催している。ナクールと校長はごく近くに住んでいる。タクールはジャマプクルにおられたころ、ゴーヴィンダ・チャトジエーの家に滞在なさつた。その昔馴染みの家を、ナクールは校長に見せに連れていってくれたことがあつた。

(訳註、ババジ——ヴィシユヌ派の托鉢修道者をいう)

〔聖ラーマクリシュナ、宇宙の母の称名讃歌をうたい喜ぶ〕

タクールは、靈的恍惚状態で讃歌をおうたいになる——

(歌) 常楽のカーリーよ マハーカーラ(シヴァ)の最愛の君

美^{うる}わしき女神 大いなる御母は

自らの歓びに手を拍^うちならし

永遠の現^{いま}在を踊りたわむる

元^{はじめ}初より在^ありて永遠なる君は

空無の色^{すがた}相に月輪をかざり

どくろの首輪 つけ給いしは

全宇宙のいまだ生まれぬ^{さき}前か

大いなる御母は 全^{すべ}てを動かし

われら ただ君の秩序に従う

させ給うままだ われは為し

言わしむるままだ われは言う

愚かなるカマラーカーンタは

美しき大実母をのしりて言う

カマラーカーンタ——ベンガルの詩人

「地上のいとなみ理由もかまわず
善悪ともに壊して遊ぶ」と

(歌)

われらの大実母は 二つなき救い主
あなたは三つのグナを支える至上の御方
われらの上に 慈悲かぎりなく注ぎて
常に苦を除し給う

あなたは日毎の勤めに読経のなかにおいて
御母よ 君は宇宙を支えるお方
この世の果てなき海をおよぐ我を
寛き心もて 導き給う

あなたは水に あなたは地に在し
あなたはすべての元め すべての根に在す
生きとし生けるもののなかに在し
形ある神とあらわれ 理の神と遍在し

理の神——真理、原理

(歌) 混沌の中に真実がある 混沌を離れ、真に在るものを得よ

.....

(歌) 心がすすめば、仕事に用なく、地位や財産にも用はない！

.....

(歌) この世の海にこぎ出した私の小舟は

大実母よ いまにも沈みそう

迷妄の嵐は烈しく 無知の霧はたちこめ

大実母よ 心細さは募るばかり

(歌) 母と子で

ちよつと悲しい話をいたしましょう

ある人は 象にまですてきな天蓋を

ある人は 押し米にやつとドイ(ヨーグルト)をかけるだけ

そして、聖ラーマクリシュナは信者たちにこんな話をなさる。「世間の人たちに、気の滅入るような話ばかりするのはよくないよ。愉快にしなければ。年中、貧乏している連中は、二日位食べ物がなくても何とか辛抱できるが、食事の時間がちよつと遅れただけで体調をこわす連中もいるのだ。こういう種類のの人に、悲しい、つらい話ばかりするのはよくないよ。

ヴァイシュナヴァ・チャランはよくこう言っていた。「罪、罪と、ツミの話ばかりして、いったい何になる？ 朗らかに暮らせ」とね」

タクルが食事をなさつて一休みされるかされないうちに、キールタンの歌い手、モノホル・ゴースワミーが入ってきた。

〔聖ラーダーの恍惚とした気分になられた聖ラーマクリシュナ——タクルはガウランガか〕
(チャイタニセ)

ゴースワミーは求愛の讃歌をうたった。ほんの少しお聞きになると、すぐタクルは、求愛しているラーダーの気分になられるのだった。

最初は先ず、ガウル・チャンドリカ(序曲)である。「お手を——ああ、やるせない——きれいな手——今日はまあ、どうしてこんなに胸がさわぐ？——そうだ、ラーダーの気持ちがあつてこんなに胸が切ないのだ」

ゴースワミーはつづけて歌う——

家の外へ じりじりと引かれていく

何という落ち着きのない私のこころ

吸う息 吐く息も荒く

カダムバの花咲く森へ行きたくて

ラーイ(ラーダー) どうしてこんな風になってしまったの

カダムバ——クリシュナが天国のインドラ神
の庭から盗んで地上に植えたときれる樹
ラーイ——ラーダーの自分への呼びかけ

歌のこのくだりをおききになると、タクール、聖ラーマクリシュナは霊的恍惚状態になられた。着ておられる上衣を引き裂いて、ほうり投げてしまわれた。

歌い手は次をうたう——

あなたの そのひんやりした手で触られて——

体はこんな風に震えるの！

すると恍惚状態のタクールは、ブルブル震えていらっしやる！

タクールはケダルを見やりながら、キールタンの節回しで次のようにおっしゃる——「いとしい人を、命かけたわたしの恋人——クリシュナを連れてきておくれ、ねえ、親友のあんただったらでできるでしょ。そうよ、連れてきておくれ。それが無理なら、私をあの人のところへ連れてって。一生、あ

んたたちの奴隷になるから——」

歌い手のゴースワミーはタクルのこの恍惚状態あかりさまを見てすっかり感動し、手を合わせてお願いする——「どうぞ、私の俗っぽい気持ちを追い払って下さい」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハ。修行者は宿を決めてから歩き廻る。あんたはおもしろい人だね。あんたの内部なかから、あまい果汁しるがあふれているよ！」（訳註、宿を決めて……神を掴んでから遊戯リ遊戯を行う意）

ゴースワミー「ご主人さま、私は砂糖を運ぶ牡牛お牛——。でもこのまま、砂糖を味わうことが出来ないのでしょうか?」

またキールタンは先に進んだ。歌手は聖女シュリー・マデー（ラーダー）の有様を物語っている——

カッコーの群れが 鳴いている

カッコーの鳴き声をきいて、聖女シュリー・マデー（ラーダー）にはカミナリが轟とどろいているように聞こえた。それでなぜか、ジャイミニの名をとなえた。そして言う——「ねえ、私のお友だち。クリシュナと別れたら私は生きていけない。私のむくろを、タマラの樹の枝にかけておくれ」（訳註、ジャイミニ——聖仙リシヴェーヤーサの弟子でサーマ・ヴェータを継承したとされる聖仙リシ。タマラ——クリシュナを連想させる黒い樹肌リシの木）

ゴースワミーがラーダーとクリシュナの融合の歌をうたってキールタンは終了した。